

オーケストラ

関西フィルハーモニー管弦
楽団(第249回)

7月18日・ザ・シンフォニーホール

●矢崎彦太郎(指揮)、青木早希

(org) ●ブーランク《牝鹿》「オルガン、弦楽とティンパニのための協奏

曲」、ショーン「交響曲」

《フルチネルラ》を思わせるような

爽やかな軽快さと、色彩感豊かな音

色で彩った《牝鹿》。膨らみ豊かな

管楽器群と純化した弦の巧みなハラ

ンスがしなやかな躍動感を醸し出し

た。多様な舞踏の情景を想起させる

バレエ組曲だが、拡散せずに全体を

まとめ上げたのは上手い。これと対

極の世界を描いたのが「協奏曲」だ。

オルガンとティンパニの暗示に満ち

た対話に弦楽器群が絡み合う時、そ

こはかとなし悲しみや危機の予感が

放射される。ブーランクの異なる世

界が提示された形だが、いずれも洒

脱さに満ちていたのが興味深い。

後半のショーンも凝縮した響き

が美しい。矢崎のタクトは3つの楽

章それぞれを丹念に、ある意味で対

比するよう積み上げた。親しみや

すい歌謡的な旋律や響きが随所に顔

を出す、けっしてハナールに流れ

ず、大きな流れへと収斂されてゆく。

この曲でもその華麗さの彼方に、危

機へ向かうようなある種の不安感を

描き込んでいた。この日の関西フィ

ルは管、弦ともに矢崎の要請に柔軟

に応えていた。フランス曲の魅力、

時代の「驛」を内包する独特の耀きを

を引き出した好演である。

●嶋田邦雄